

Title	臨床を見据えた解剖学研究と教育
Author(s)	井出, 吉信
Journal	歯科学報, 112(4): 536-536
URL	http://hdl.handle.net/10130/2868
Right	

特別講演 7

臨床を見据えた解剖学研究と教育

東京歯科大学解剖学講座教授 井出 吉信

私どもの解剖学講座では、高度な臨床と臨床教育は、確実な基礎教育を礎として発展して行くものだと考えてきました。そのため、直接臨床に通じる研究・教育に長年力を入れてまいりました。これまで私の研究の歩みを振り返ると大きく3つに分けられます。

第1は「顎関節の解剖学」であり、これは大学院歯学研究科に入学した時、与えられた研究テーマが「胎齢に伴うヒト胎児顎関節の形態変化に関する研究」でした。所見として胎児顎関節の発育方向は下顎頭では外後方に、下顎窩は内方に広がることがえられ、小児顎関節の発育との共通点が認められました。この所見は小児歯科および歯科矯正の治療の考え方を定める一助となったものと思います。

第2は「歯科インプラントを安全に行なうための顎骨および顎骨周囲の解剖学」です。近年において盛んに行われるようになった歯科インプラント術ではありますが、偶発症などの問題を抱えています。歯の喪失に伴い顎骨の外部形態は勿論、内部構造にも大きな変化が生じることにより、顎骨周囲ならびに内部を走行する血管・神経の分布にも変化が生じます。これらのことを踏まえて医療事故を抑止するための解剖学として有歯顎と無歯顎における顎骨の形態的特徴、顎骨周囲の筋と血管・神経の走行および顎骨との位置関係を明らかにしました。

第3は「安全に食べるための摂食・嚥下にかかわる器官の解剖学」であります。超高齢社会を迎えた現在、高齢者の摂食・嚥下機能の低下・障害が問題となっていることに鑑みて、口腔、咽頭、喉頭などの筋・神経の走行およびメカニズムを形態学的に解析してきました。

一方、教育においては、研究でのエビデンスを土台として学生が理解しやすいよう、CD・ビデオなどITを取り入れた講義も行ってきました。しかしながら、コンピューター上でバーチャルリアリティとしてあたかも体内を旅したかの様に、人体の構造を理解できたと錯覚してしまうような方法のみで行う教育が適切なのか疑問であります。

今日では、解剖学実習を模型やIT上での教育が良いと唱える教育者もいますが、最終的には、御遺体実習で「剖出して」、**「種々の方向から観察して」**、「触って」、学ぶことが重要であります。このことにより、学生が筋・神経・脈管など、人体の立体的位置関係をきちんと把握でき、さらに感触を体験することにより臨床との関係をより深く理解し、延いては医療事故を抑止することに繋がります。更に献体された御遺体での実習により医療人としての心構えが養われるものと考えます。これらの取組が次世代へのより良い歯科医学教育の布石となれば幸いです。

《プロフィール》



＜略歴＞

昭和47年3月 東京歯科大学歯学部卒業
 昭和51年3月 東京歯科大学大学院歯学研究科修士
 (解剖学専攻)学位受領(歯学博士)
 昭和51年4月 東京歯科大学解剖学教室助手
 昭和52年4月 東京歯科大学解剖学教室講師
 昭和55年4月 東京歯科大学解剖学教室助教授
 昭和59年10月 東京歯科大学解剖学教室教授
 平成16年6月 東京歯科大学学監
 平成16年6月 学校法人東京歯科大学法人主事
 平成19年6月 東京歯科大学副学長
 平成23年7月 東京歯科大学学長
 現在に至る

＜学会活動等学内外役職＞

東京歯科大学学会(会長)

日本歯科医学会(顧問)
 日本解剖学会(解剖体委員会委員)
 日本歯科医学教育学会(理事)
 日本口腔インプラント学会(監事)
 財団法人日本篤志献体協会(理事)
 日本摂食・嚥下リハビリテーション学会(評議員)
 公益財団法人ライオン歯科衛生研究所(理事)

＜主な著書＞

図説新歯牙解剖学
 顎関節機能解剖図譜
 臨床医のための顎関節疾患入門
 最新・歯科局所麻酔ハンドブック(著分担)
 顎関節症入門(著分担)
 カラーグラフィックス 下歯槽神経麻痺(著分担)
 生涯研修ライブラリー: No213顎関節疾患を理解するための解剖
 CD-ROM 人体解剖学(1.骨学, 2.筋学)
 画像でみる歯の解剖
 摂食・嚥下のメカニズム
 画像でみる歯科放射線学

＜主研究テーマ＞

顎骨の内部構造、顎関節の構造、摂食・嚥下に関与する器官の解剖